童女のごとく

母円地文子のあしあと

冨家素子

童女のごとく

母円地文子のあしあと

冨家素子

海竜社

童女のごとく〈母 円地文子のあしあと〉

平成元年十二月十日　第一刷発行

著　者　冨家素子

発行者　下村のぶ子
発行所　株式会社　海竜社
東京都中央区築地二ノ九ノ二　（郵便番号）一〇四
電話　東京〔〇三〕五四二一—九六七一　振替　東京一—四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所　白陽舎印刷工業株式会社（㊢）
製本所　大口製本印刷株式会社

© 1989, Motoko Fuke, Printed in Japan

童女のごとく——目次

母　円地文子のあしあと

*1*の章　童女のごとく
家事ができない母……7
母が選んだ結婚……16
旅の恥……24
赤大根かピンク大根か……33
猫派四代……41
墓騒動……55

*2*の章　母の物差し・父の物差し
愛情は測れるか……65
書庫のある家……71
家族の風景……77
父のロマンス……83
飢えの時代に……87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父のうしろ姿……93

3の章　母のルーツをたどって

芝居好きの家……101

絵本代わりの『源氏物語』……107

画家志望……114

上田家の教育……119

浅草と上野……128

小説『女坂』と村上家……135

4の章　出会いの季節

出会いの旅……147

熱海ホテルと富士屋ホテル……154

女たちの鎌倉……162
軽井沢夏物語……168
避暑地の人びと……178

5の章　作家の顔・女の顔

母の目……187
尾崎一雄と三島由紀夫……195
和服でハワイ大学の源氏講義……203
サインペンの原稿……210
娘婿の献身……215
あとがき……220

ブックデザイン・司　修

1の章　童女のごとく

家事ができない母

わがままお嬢さんと武家の女の心意気と

母が亡くなってから三年もの歳月がたってしまった。それなのに家の中は、どこもかも母のいた時と何も変わっていない。書斎も生前のままだし、母の着物の始末なぞもなかなか捗らない毎日である。強いて言えば母の写真と名前を書いた位牌が、母がこの世にもういないことを物語っていると言えようか。

しかし、母がふっとそこに立っているように思ったことが一度もないのは、おそらくあの車椅子のせいである。母は亡くなる前八カ月ほど、脳梗塞の後遺症で車椅子を使っていた。車椅子は、ミステリーや、テレビのスリラーの道具にもよく使われるが、足音がぜんぜんしないので、大変不気味な感じがして、私は大嫌いだ。

母が丈夫な時はいつも、自分の存在をことさら主張するかのように、スリッパのパタンパタンという大きな音が聞こえていたものだが、その音が全然しなくなって、予告もなし

にスーッと車椅子で現れるのには本当に嫌な感じがしたものである。

あの特徴のあるパタンパタンというスリッパの音は、今も私の耳にひびいてくる。その音は、母が家にいるという証しだった。

母は家族に物を書く姿を見せない人であった。生涯に少なからざる作品を書いた母であったが、幼い頃からの私の記憶のどこをさがしても、机の前に座ってはいても原稿用紙に向かっている母の姿を見た覚えはない。母が原稿を書くのは決まって午前中だけで、それも部屋を締め切って書いていた。私の子供の時分は原稿の注文もさしてなかったから、私は母が作家だなぞとは思わなかったし、中流から上の家庭の奥さんとしか思ったことはなかった。

戦後、いわゆる流行作家になってからも同じシステムで、仕事は午前中に終わり、午後は来客か外出、そうでない時はよく、隣に住んでいた姉の宇野の伯母の家に行って、とりとめのない世間話などを心おきなくしていた。夜も、夕飯を食べた後はよくテレビを見ていたが、私の夫のKが風呂から上がってウイスキーを飲み始めると、彼を相手に飽きることなく延々と話し込み、時には真夜中を過ぎることもあった。

時には原稿をせかされて、一、二日ホテルに缶詰になることもあったが、どんな時でも締切の約束を反故(ほご)にしたことは一度もなかった。物を書くことは、あくまでも母自身の問

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

題であって、その影響が家族に及ぶことはなかった。

私にとって、母は作家円地文子であるよりも、一人の母親であり、いくつになってもお嬢さん気の抜けない一人の女であった。

瀬戸内寂聴さんに言わせると、母は〝生まれっぱなしのお嬢さん〟だったし、吉行淳之介さんは『銀座百点』という小冊子の「円地文子先生を偲ぶ」の対談で、

「円地さんの話をしてて、天衣無縫とか、ああいう言葉出しておかないといけないような気がするから言っておくと、生前、本人に天衣無縫、天真爛漫、歯に衣着せぬとか、いくつか並べて聞いてみたら、私は天真爛漫がいいわ、と。これがいちばんお気に入りのようでした」

と言っていられるが、まったくそのとおりであった。私の夫のKも、母の死んだすぐ後、『週刊文春』のインタビューで母のことを、

「一言でいうと昔のお嬢さんなんです。これは一生、死ぬまで続きましたね。ところが、そのお嬢さんが懐剣を忍ばせている。『いざという時は』という明治の武家出の女と、完全にわがままなお嬢さんと、両方が存在していたみたいですね」

と評している。母は、自分がこうと決めて口にしたことは、決して途中で変更することはなく、必ず実行した。これも武家の女の心意気であろう。私は海外旅行が好きなのでよ

く出かけるが、ツアーの、私より年上の男性に、
「あなたを見ていると〝昔のお嬢さん〟とか、〝可愛がられたお嬢さん〟という感じがする」
とよく言われることがある。その点、私は母の分身なのかも知れない。

家事ができない母

私は結婚した時、家事は何一つできなかった。お釜を洗うのに、ついている米粒をどうしようかと途方に暮れたものである。自慢ではないが、我が家の女、上田の祖母と家の母は家事をしたことがないのだ。
母は、つねづね、
「お祖母ちゃまには、一生、ご飯は炊かせない」
と宣言していた。祖母は八十一歳で亡くなるまで、ついにご飯を炊くことはなかったが、では母がご飯を炊いたかというと、とんでもない話である。母は炊事はもとより家事を一切しない人だった。
上田家の女性は、祖母も母の姉もお手伝いがいるから家事をしないだけで、いざとなれば何でもできた。

祖母はおはぎを作るのが上手で、お彼岸の頃にはよくお手伝いを指図して拵えた。母の話では母が子供の時分、暮れになると祖母の実家の村上家から大きな切り溜め一杯に塩辛が送られて来たが、麹が入った塩辛はとても美味しかった、とよく言っていた。その塩辛は母の小説『女坂』のモデルの一人であるお妾さんの得意の品であった。

伯母たちは何でもよくできたが、台所専門のお手伝いがいる以上、自分からは決して台所へは入らなかったし、上田の伯母にしても、どこかで習って来た西洋料理とか、珍しい変わった料理など自分の趣味の範囲でしか、料理には手を出さなかった。

しかし、母だけは例外で、家事は心底苦手で、また本人にやろうという気が全然なく、一生、人に頼り切りで、自分が立ち働くことなど皆無であった。それでいて私に、

「私が家のことは見てないと思っているかもしれないが、これでも、ちゃんと見る所は見ている。気配りをしているからお手伝いだって何年も居つくのだ」

と威張っていた。

あれは戦争中のことだった。空襲が始まって疎開する祖母に、たった一人いたお手伝いをつけて上げた時ばかりは、母もさすがに困ったようだ。それでも親しい奥さんに頼み込んで、空襲の間中、通いで家事を手伝いに来て貰っていたが、朝食の雑炊は父が役所に行く前に自分で作っていた。

東京の家が空襲で焼けてしまった後、私たちは軽井沢の別荘で一冬を過ごした。どういうわけかその時、母はご飯が炊けるようになったと自慢していた。今と違って、軽井沢にはプロパンガスはなかったから、確かコンロに新聞紙を入れて火をつけ、粗朶(そだ)で火を起こしたのだと思う。その上にお釜をのせて火加減を見ながらご飯を炊くなど、不器用な母にはとうていできそうには思われない。当時はお手伝いもいたし、これは奥様の炊いたご飯です、と聞かされた覚えもないから、どうもこの件は眉唾物だと私は思っている。

要するに昔は、良家の夫人は家事はお手伝いまかせで、料理は趣味でしかなかったということだろう。私も子供の時分、台所にはお手伝いと一緒にしょっちゅう入り浸っていたが、遊び半分で包丁でも持とうものなら、

「お嬢ちゃまは、そんなことをしてはいけません」

とすぐ取り上げられた。

祖母を上田の家に嫁として迎える時、祖父は自分の母親、つまり、私の曾祖母に、祖母はお嬢さん育ちだから、お手伝いをもう一人増やすからと了解を取り、そのようにしたという。曾祖母も快く承知し、祖母と曾祖母は終生仲のよい嫁姑として、祖母は恙(つつが)なく義母を見送った。このことは祖父の祖母にたいしての思い遣りであり、昔の人にしてはやはり若いうちに外国に留学したりしたことがためになっていると思うが、祖父は随分祖母にた

いして優しかったし、フェミニストだったのだと思う。それにしても、祖父の言い分に不服も言わず、そのとおりにした曾祖母も見識があって偉いと思う。

上田の家では親類でもどこでもお手伝いを桂庵（当時の職業紹介所）から雇うことはしなかったので、よく祖母が祖父に、

「お父様、また、○やが暇を取ります。後の人をお願い致しますよ」

と頼むと、祖父が自分のお弟子さんのつてで、必ず期日までに新しいお手伝いを見つけて来たという。

そういう両親に育てられた母は、家事の監督はできても、実際には何も知らなかったし、できなかった。父はそんな母に何も要求しなかった。

電気釜が爆発する！

私に、お釜はしばらく水に浸してからタワシで擦れば米粒は簡単に落ちる、などという家事のいろはを教えてくれたのは夫のKである。彼は東京の軍医の家に育ち、まあ、お坊ちゃんと言われる環境にあったから、別に家事をしていたわけではない。六人兄姉の末っ子で、三人の姉は全部自由学園の出身だから、非常に合理的な考え方をする一族である。およそ、我が家とは合わないと思うのだが、Kにはかえってそんな家が物珍しく、新鮮に

映ったようだ。Kは、
「家事など見ていれば自然にわかるもので、やって見れば何でもできる。要するにお前は頭が悪いのだ」
と威張っていたが、お説のとおり教えて貰って、後は実際に経験すれば、慣れで家事は誰だってできることなのだ。それに私の場合は母のように「やって頂戴」と言えば誰かがやってくれるようなわけにはいかないのだから、自分を頼りに、好むと好まざるとに関わらず、自分で家事をやっていかなければならない。今はそういう時代なのであろう。
母が多少とも自炊らしきことをしたのは、『源氏物語』の全訳をするために借りた目白台アパートに住んでいた頃である。
それは五年もかかった長い仕事だった。休日は家に帰っていたが、週六日はアパート暮らしであった。昼間はいつも通いのお手伝いがずっと来ていた。週一回、お手伝いの来ない日は、母は階下の食堂で好きな物を注文して食べていた。しかし、それも、暫くすると飽きてしまった。
ある日、母は、電気釜でご飯を炊いてみようと思い立った。ちょうどKが、勤めの行きがけに車でアパートまで母を送った時である。母はKに、ついでにすぐ炊けるように電気釜をセットして貰った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com